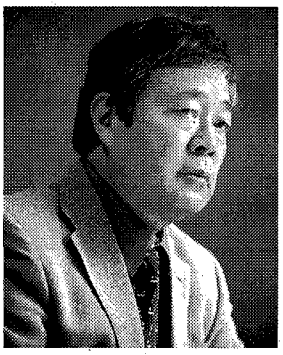
埼玉経済

サイ・テクこらむ　知と技の発信【37】

埼玉大学・理工学研究の現場

地表面を覆う植生を科学する

佐々木 寧　埼玉大学大学院理工学研究科 環境科学・社会基盤部門教授



■ビオトープ

東日本大震災では、元の姿へ、かくも強制的に押し戻した自然の力をまざまざと見せつけられました。

2004年インド洋大津波、06年にはジャワ島でも津波の現場を見てきました。ジャワ島ではメラピ火山の噴火災害も同時期に発生していましたが、そこには頻発する災害に向き合う人々の姿もみられました。

以前には、日本全国の植生調査に駆けずり回っており、ドイツ欧州の地を巡る機会も得ました。日本ではちょうど高度成長期、調査しているすぐ後ろから自然の森が伐採されていた時代です。

そんな中で、ドイツやEUの環境政策に学び「多自然型河川工法」や「ビオトープ」の基本理念などを「環境科学」などの講義の中でも紹介してきました。

■災害の調査・研究

1995年、工学部教授になって、研究室での仕事内容も少し変わり、都市内での緑地の在り方から、河川水害、土石流、地震、津波、火山など災害に関わる調査・研究が多くなりました。災害の多い我が国特有の事情があるからであり、地表面を覆う植生も災害と無縁ではないからです。

他分野の研究者達も地表を覆っている植生を無視して考えられない状況を感じてはいるものの、いかんせん、理論式にうまく乗らない少しやっかいな代物が生物分野なのです。未知の部分が多いということでもあります。

今後は他分野の研究者らとお互いの知見の集積と共同研究、協働作業で新しい解決法が見いだせると思います。

■自然の管理

明治から戦後にかけて荒廃した国土を緑化に努め、今や先進国トップクラスの森林率を誇る我が国、問題はその多くが人の管理を前提とした人工林であることです。田畑を営んできた里山も人の管理が不可欠です。

経済構造の変化、高齢化が進む今の我が国ではもはや支えきれないのです。森は山を守る一方で、ときに斜面崩壊や、土石流とともに流木となって災害を助長する場合も多々あります。今後はより安定した自然の森への転換を図りながら、新たな野山の利用形態を考えていかねばなりません。

津波で破壊された海岸松林を見て、画一的なモノカルチャーの森づくりも、もう変えねばなりません。地域の自然にあった広葉樹を使うべきです。一方で豊富な森林資源の新しい利用の形を模索すべきです。

地球規模での環境変化の中、これまで災害と無縁であった国々も同様の問題を抱えています。自然の摂理に沿った、持続的で生態学的な環境管理の仕方を考えていかねばなりません。

◇　◇　◇

佐々木寧氏（ささき・やすし）46年生まれ。弘前大学卒業。理学博士。横浜国立大学、西ドイツ理論応用植物社会学研究所を経て、82年より埼玉大学。91年から教授。専門は植物生態学、応用生態工学。

企業、団体商店街などの話題や情報をお寄せ下
TEL 048・795・9161 FAX0